

平成21年6月25日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730409
 研究課題名（和文） 幼児期の三者関係の成立と維持にかかわるコミュニケーションスキルの発達的研究
 研究課題名（英文） Communication Among Preschool Children in Triads

研究代表者
 礪波 朋子 (TONAMI TOMOKO)
 京都光華女子大学・人間科学部・講師
 研究者番号：20377229

研究成果の概要：本研究では幼児期の三者関係の成立と維持にかかわるコミュニケーションスキルについて検討するため、幼稚園児3人組の協同課題の実験場面を設定し、発話と動作について分析を行った。さらに、女子大学生3人組の協同課題場面の分析を行い、高度な三者間コミュニケーションについて検討した。その結果、幼児の三者間コミュニケーションには大人の場合と同様に発話量、発話時の視線、笑いが、さらに幼児独自のものとして模倣が重要な役割を果たしていることが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	150,000	2,350,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：発達心理、幼児、三者関係、会話、コミュニケーションスキル、笑い、模倣

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、子どもの人間関係力の低下が問題となってきている。子どものつきあいが「2人1組」を中心にした少数化と均質化が進み、一部では幼児期にすでに1対1関係が主流になり、集団的な関係調整が苦手だということが指摘されている（朝日新聞(大阪)、2004.7.15、7.24）。

(2) 二者間のコミュニケーションに関しては、礪波ら(2002, 2003)が子ども2人組の共同意思決定場面や協同課題場面における発話や行動を詳細に分析し、幼児期においてす

で高度で複雑な意図調整が行われていることを明らかにしている。三者間ではさらに微妙な意図調整が必要だと考えられる。

(3) 幼児期に三者以上の関係を築くことは、仲間関係の基盤として重要な意味を持つと考えられる。しかし、幼児同士の三者間コミュニケーションを検討した研究はまだ非常に少ない。二者関係と三者関係の違いは、量的な違いのみでなく、関係の質的違いが生じるとされており、社会一人モデルであるソシオン理論（藤澤、1997）の中でも、三者関係は二者関係とは比較にならないほど複雑

な様相を呈し、集団特有のダイナミズムを作り出すことが示されている。

(4) 本研究では、幼児が二者間のコミュニケーションを超えて三者間のコミュニケーションを築いていくためにはどのような力が必要かを検討することを目的とする。具体的な方法としては、幼児3人組での協同課題遂行場面を実験的に設定し、子どもの発話や行動について微視的な分析を行う。

2. 研究の目的

(1) 本研究の1つめの目的は、バランスを保つことが難しい三者関係の中で、子ども達がどのような発話や行動によってコミュニケーションを成立させ維持しているかを明らかにすることにある。さらに、三者関係で用いられるコミュニケーションスキルの発達過程について検討することを目的とする。

(2) 具体的な目的として幼児の三者間コミュニケーションと大人の三者間コミュニケーションを比較することにより、以下の項目について明らかにする。

①三者関係において協同課題場面で使用されるコミュニケーションスキルとその発達的变化

②円滑な三者関係を築くために必要なコミュニケーションスキル

③子どもの日常場面での仲間関係と、実験場面で用いたコミュニケーションスキルとの関連性

④二者関係におけるコミュニケーションと三者関係におけるコミュニケーションとの質的相違

3. 研究の方法

(1) 幼児期の三者関係の成立と維持にかかわるコミュニケーションスキルの検討

①幼稚園児3人組のコミュニケーションについて詳細に検討するための実験を行った。

対象児は、幼稚園3歳クラス児15名(男児9名、女児6名;平均年齢4歳7ヶ月)で、実験材料として小麦粉粘土、ミニカー、人形、小型のおもちゃを用いた。幼稚園の一室を実験室として使用した。子ども達は同性3人組で実験室に入室し、実験に参加した。まず、実験者は子ども達に課題が粘土遊びであることを告げ、好きな席に座るように求めた。その後、実験者は子ども達に3人で一緒に粘土を使って、何か1つ好きなものを作ると教示した。粘土遊びが終わりの時間(10分経過時)になったら実験者が迎えにくるが、それまでに作品ができあがり帰らなくなったら呼び鈴を鳴らして知らせるようにと告げた。課題の見本として、実験者が粘土で雪だるまを作って提示し、机の上においてある小さなおもちゃは自由に使ってよいことを告げ、実験を開始した。子ども達が呼び鈴を

鳴らした時点、もしくは粘土づくりを開始して10分経過した時、実験者は子ども達のところに行き、粘土作りの終了を告げた。デジタルビデオカメラとMDレコーダーを設置して、子ども達の発話および行動を記録した。本研究では、子ども達が3人で粘土遊びをしている場面の10分間の発話及び動作のデータを分析対象とした。その間の子ども達の発話をMDから逐語的に書き起こし、ビデオテープにより子ども達の動作を書き加えたトランスクリプトを作成した。

②実験終了後、実験に参加した子ども達の日常の保育場面における関わりについて担任教師にインタビューを行った。実験に参加した二児間及び三児間で、日頃どの程度関わりあっているかということについて3段階で評定を求めた。

(2) 大人の三者関係で使用されるコミュニケーションスキルの検討

①円滑な三者間のコミュニケーションの特徴を明らかにするため、女子大学生3人組での協同課題遂行の実験場面を設定し、三者間の相互作用を検討した。参加者は女子大学生15名(平均年齢21歳)で、協同課題の実験材料としておもちゃのブロック(ハウスセット)を使用した。実験は大学の一室で行った。女子大学生は3人1組で実験に参加した。実験者は実験参加者に、子どもとの比較データ収集のため、ブロックを使用して3人で一緒に15分間で1つの作品(家)を作ると教示した。15分間の参加者の発話と行動は、参加者の許可を得て、実験室内に設置したデジタルビデオカメラとICレコーダーを用いて記録した。

本研究では、女子大学生3人でブロック遊びをしている場面の15分間の発話及び行動のデータを分析対象とした。

②実験終了後、実験参加者の二者間及び三者間で、日頃どの程度かかわりあっているかについて実験参加者各自に3段階で評定を求めた。

4. 研究成果

(1) 幼児3人組の協同課題場面でのコミュニケーション 本研究は子ども達が円滑な仲間関係を築くために必要なコミュニケーションスキルについて検討するため、幼児3人組の相互作用を詳細に分析し、二者間コミュニケーションと異なる三者間コミュニケーション独自の特徴を明らかにすることを目的としていた。そのため、本研究では、幼児3人1組で一緒に協同課題を行う場面を設定し、バランスのとれた三者間コミュニケーションの特徴について検討する。

本研究では、4歳児が仲間同士の3人組の遊び場面でどのようなコミュニケーションを行っているかについて分析を行った。4歳

児 15 名（平均年齢 4 歳 7 ヶ月）が同性 3 人 1 組で 10 分間粘土遊びをするという実験場面を設定した。本研究では、粘土遊び場面で生じた子ども達の発話と行動を対象に、発話数、視線行動、笑い、模倣の頻度について分析を行った。

これらは、大学生同士の三者間会話場面を検討した研究(大坊・磯・木村、2005)で用いられていた視線行動、うなずき、笑顔、発話量という行動指標を参考に、幼児同士のコミュニケーションにおいて重要だと考えられるものとして選定した指標である。

発話数は、グループ内での言語的コミュニケーションの活性化の程度を示すものと考えられる。

話者による視線行動は、話者がその発話を誰に向けたものであったかという発話の宛先を示すものである。その回数は、グループ内での発話のうち、明確に他者に向けられた発話の数を示すものだと見える。

笑いは、基本的には「快」や「喜び」の感情に対応する表情であり、その場面での楽しさを示すものだと考えられる。本研究では、明確に笑いと判断できるものとして音声をともなった笑いのみを対象とする。

また、無藤(1997)は、子ども同士の協同性はお互いの動きを模倣したり対応した動きをしたりすることから成り立つことを指摘している。そこで、本研究では粘土遊び場面の模倣についても子ども同士の関わり合いを示す指標として検討した。

以上の4つの指標に基づき、まず各グループのコミュニケーションの特徴について検討し、さらに本研究で見られた三者間コミュニケーションのタイプと、日常の保育場面での子ども同士の関わり合いの程度の関連について検討した。

その結果、以下に示すように3人組のコミュニケーションの特徴が各グループで非常に異なっていることが明らかになった。

① 発話と視線の分析の結果、三者間コミュニケーションにおける子ども同士の関係は、比較的三者間での関わりがみられないグループと、特定の二者間での関わりが優位なグループと、あまり相互の関わりがないグループとがみられた。

② 笑いの頻度については、粘土遊び場面では1グループ以外では比較的良好に笑いが生じており、特に2グループでは共有された笑いが多く生じていた。粘土遊びとは無関係に笑いを引き起こすようなタブーに関する発話は、相手が笑うだろうという行為をしてみ、相手との親和関係を樹立または確認しようという積極的な働きかけだといえる。笑いの発生は、粘土遊び場面において、単に粘土を作る活動自体を楽しもうというだけでなく、他児と積極的に関わりあうことを楽しん

でいたことを示していると考えられる。

③ 模倣について、粘土遊びのなかで子ども達はお互いの発話や行動をまねしあう様子がみられた。各グループで発話と動作を含めてどの程度模倣が行われていたかを検討した。動作については、その場面である子どもが初めて行った独特の動作を見て他児が同じ動作をしたとき、もしくは最初の子どもの一連の流れの動作と全く同じ流れで同じ動作を行ったときのみ模倣としてカウントした。発話に関しては、完全に同じ言葉をまねした場合のみでなく、言葉の一部をまねした場合も模倣としてカウントした。その結果、2グループで10回以上の模倣が生じており、3グループでは模倣は2回以下であった。模倣が多かったグループでは子ども達がお互いに相手の言動に非常に注意を払っており、他児の独特の口調やリズムやタイミングをまねて、相手と顔を見合わせることも多く、発話や動作を共有しあい、お互いのつながりを楽しむことを目的としていたと考えられる。

④ 子どもの日常場面での仲間関係により、実験場面でのコミュニケーションがどのように異なるかについて検討した。その結果、日常の生活場面で、3人組で遊ぶことの多い2つのグループでは、実験場面でも発話時に相互に視線を向け合うことが多く、笑いもよく生じ、他者の発話や動作を模倣することも多く、3人それぞれがお互いに関わり合っており、実験場面においても三者間で比較的対等で活性化したコミュニケーションが行われていたといえる。

一方で、日常生活では3人一緒に遊ぶことがあまり多くないグループでは、個人の発話量に差がみられ、他児に視線を向けたり、他児の模倣をしたりすることが比較的少なく、3人の間で均等なやりとりは行われていなかった。また、日常場面では2人で関わることの多い子ども達も、実験場面での3人組の中では必ずしもコミュニケーションが活発ではなかった。つまり、二者間では比較的良好な関係が築けている場合でも三者間のコミュニケーションは難しいと考えられる。

⑤ 子ども同士の三者間コミュニケーションをうまく成立させ維持するために必要なスキルについて検討した。その結果、年少児では、双方への視線や顔の向き、発話の宛先の不定性、独語に対する応答性などが三者間のコミュニケーションの成立と維持に影響する可能性が示された。また、三者間で共有するものとして笑いや模倣が重要な役割を果たしていることが認められた。二者間コミュニケーションでは発話や行為の対象が明確だが、三者間ではコミュニケーションの送り手と受け手が不確定であるためコミュニケーションの成立には発話や行為の宛先の

特定が重要だと考えられる。ただし、大人の相互作用と異なり、年少児は人数にかかわらず宛先のない発話（独語）を行うことが少なくない。その点を考慮すると、幼児期には独語に対して応答可能な者が多い方（人数が多い方）が、コミュニケーションが成立しやすい可能性も考えられる。

(2) 幼児の三者間コミュニケーションと比較するため、仲の良い女子大学生3人組で協同課題をするという実験場面を設定し、大人の三者間コミュニケーションで使用されるスキルについて検討することを目的とした。本実験では、女子大学生15名（平均年齢21歳）が実験に参加した。3人1組で15分間ブロックを用いておもちゃの家作りをするという実験場面を設定し、実験参加者の発話と行動を対象に分析を行った。

本研究の実験場面では、協同課題遂行の意識が強いため、宛先のない発話を行っても他の二者のどちらかが応答することが多く、日常場面での三者関係と比較して安定した対話の構造がみられた。

幼児のコミュニケーションと比較すると、大人3人組では共通認識を得るための発話が多いこと、協同課題に関する他者への質問時にはグループ内の発話量によって視線を他者に向けるか対象物に向けるかが異なること、宛先を特定しない発話が多いことといった特徴がみられた。また、幼児と同様に笑いの共有が円滑なコミュニケーションの維持に効果的であったが、幼児によく見られた模倣はあまり見られなかった。三者間の日頃の関わり合いの程度は、実験場面での三者間コミュニケーションに顕著な影響は与えていなかった。本研究の結果、三者間のコミュニケーションを成立させ維持させるために必要なスキルとして、発話の宛先の不特定性、笑いを引き出す行為や発話、遂行中の課題についての他者への問いかけ、他者の動作に対する言及、発話者に対する二者の即時的な応答性などが重要であることが示唆された。

(3) 本研究で収集した三者間コミュニケーションの特徴について、過去に収集した二者間コミュニケーションのデータと比較し検討した。三者間では二者間と異なり、宛先不明の発話や動作に他児が応答しない可能性もあるが、同時に二児が応答可能であり、コミュニケーションが成立・維持しやすいとも考えられる。しかし、特定の二者間のコミュニケーションのみが優位になると三者間のコミュニケーションとしては成立しない。日常場面での三者関係の困難さは対人関係のパワー・バランスに起因することが指摘されている。本研究の実験場面では、三者間の対人関係の質については検討しなかったが、各自の発話量、視線等の三者間でのバランスが重要であることが示唆された。

協同課題という枠組みのある実験場面では、幼児の三者間コミュニケーションにおいて、協同性を示す笑いや模倣がよく見られた。また、三者が模倣しあうことにより即興的に遊びが生成されていく事例がみられた。幼児同士の二者間のコミュニケーションでは個人の意思が場の中で揺らぎながら生成されることが示されている（礪波ら、2002）。

三者間のコミュニケーションでは二者間以上に不特定性が増すため、コミュニケーションを成立・維持させることが難しいが、一方で三者間での協同性が確保されている場合には、二者間の場合以上に、創造的に発展していく可能性がある。このように二者間の会話（ダイアログ）を越えた、三者間独自の会話の特性（トライアログ）があると考えられる。

今後、さらに年齢毎に実験参加者数を増やして、三者間の会話の特性について検討していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

- ①礪波 朋子、4歳児の粘土遊び場面における三者間コミュニケーションの検討、上越教育大学研究紀要、第26巻、317-330、2007、査読無

〔学会発表〕（計1件）

- ①礪波 朋子、幼児3人組の粘土遊び場面における会話の分析、日本発達心理学会第18回大会、2007年3月25日、大宮ソニックシティ

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

- 出願状況（計0件）

- 取得状況（計0件）

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

礪波 朋子 (TONAMI TOMOKO)
京大光華女子大学・人間科学部・講師
研究者番号：20377229

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし